

個性輝くまちづくり

二つの小学校が合同で 飯盒炊飯にチャレンジ

徳島・海部町

「ふるさと教員
と
ふるさと学習」





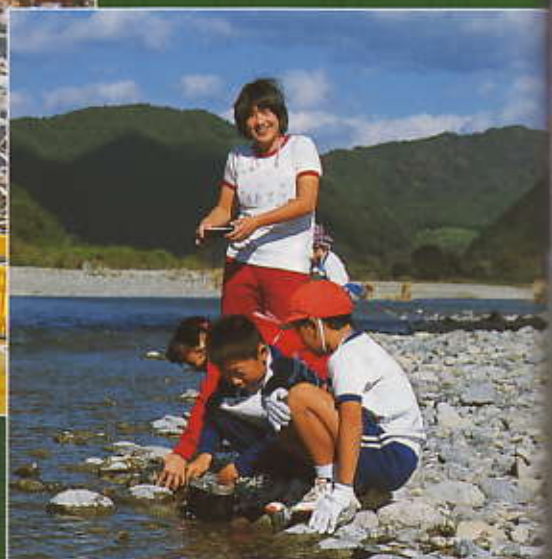
四万十川よりきれいだとも言われる清流・海部川。そこで小学生たちが、飯盒炊飯にチャレンジした。海部町が進める「ふるさと学習」の一環の授業。漁村部の東小学校と農村部の西小学校による「合同収穫祭」の締めくくりだ。

朝九時、西小学校の児童たちが一路会場の海部川を目指して歩き出す。「おはよう」と声を掛ければ「おはよーございますッ」と元気な声が返ってくる。「晴れて良かったね」などと喋りながらの道中。一方東小学校の児童は、会場まで距離があるため、三・四年生はマイクロバスで、五・六年生は自転車に到着。昨夜来の雨が嘘のような奇跡的に晴天となった。

子どもたちがふれあい農園で育てたさつまいもやお米を収穫し、それらを使ってこの日、海部川で飯盒炊飯が行われた。合同収穫祭の締めくくりの授業だ。かまどづくりから始まり、薪集め、火の調節にいたるまで教師の指導はあるものの、あくまでも子どもたちが主体となって作業は進められる。

東西小学校の一〜六年生の混成チームが八つ、上級生は下級生の面倒を見ながら飯盒炊飯が始まった。

準備が整うと子どもたちが「あちッ」などと言いつつもマッチで点火。「ところで、これ誰か中の水確かめたんか？」と山崎西小学校校長先生。実はこれがとんでもない事件の予告になるとは誰も思いもよらなかった…。



飯盒に穴が空いていて水が抜けたまま炊いてしまい、見事な黒こげご飯が出来上がった。しかし、こんな時子どもは気の利いた言葉を繰り出す。「失敗は成功のもと、や」

おこげの多い班、上手にできた班など様々だが、炊きあがれば梅干しやシーチキン、鮭フレークなどを具を入れておにぎりの出来上がり。豚汁を作ってくれた地域の大人たちも各班に混じって子どもたちと一緒に大小様々なおにぎりをほおぼる。

食後は当然片付け。六年生がふるさと教員から説明を受け、各班に戻り下級生に指示を出す。リーダーシップの養成だ。その中で役割分担と責任感も培われていくのだろう。

飯盒などを川で洗ってふるさと教員のチェックを受けるが、これがことのほか厳しい。まず一度ではクリアできない。「あく、あかなあ、米粒が残っている。もう一度やり直し」と主田先生が言えば、大久保先生は「姑になった気分やなあ」。完璧にきれいになって初めて洗い物は終了だ。

続いて川原の清掃。都会の河川と比べれば驚くほどゴミは少ないが、それでも子どもたちはビニール袋を持ってゴミ拾いをする。後始末はきちんと自分たちでやる意識を子ども頃から教えることで、清流海部川の美しさも保たれているのだろう。

このふるさと学習とはどういうものか。「学校だけが教育の場ではない」と地域も教育の場と



位置づけ、平成七年度から町費負担でふるさと教員を採用し、ふるさと学習が始まった。

地域が「学校」であれば、先生になるのも「地域の人」。地域には様々な分野で卓越した人がいる。そういう人たちに講師として活躍してもらおう学習プログラムを組み、地域のことを学習するのがふるさと学習だ。講師を探し、プログラムを組み立てていくのがふるさと教員の仕事。いわばふるさと教員は学校教育と地域教育の連携役だ。

ふるさと学習の目指すものは、地域の特性を生かし、豊かな心を持ったたくましい子ども、自ら考え生き生きと活動する子どもの育成にある。海部町は、自然・人・伝統文化、また、昔ながらの素朴さや人情味などのよさを多く残している。恵まれた環境を子どもたちの学習の場に生かし、地域を知り、地域を愛する子どもたちを育成していくことを目指し、ふるさと学習に取り組んでいる。合同収穫祭もこの取り組みの一つだ。

合同収穫祭の他にも、「海部川・母川の生き物・水質調査」や「稚魚の放流・海岸の清掃活動」、「海苔すき体験」、「大敷き網体験」などがあり、今では地域の方たちからふるさと学習のアイデアが持ち込まれるなど町に定着した教育になってきている。

■連絡先 海部町教育委員会

TEL 〇八八四―七三―〇三四二